

プレスリリース【新刊刊行】  
報道関係者各位

2011年7月18日発信

## 『東電の核惨事』刊行

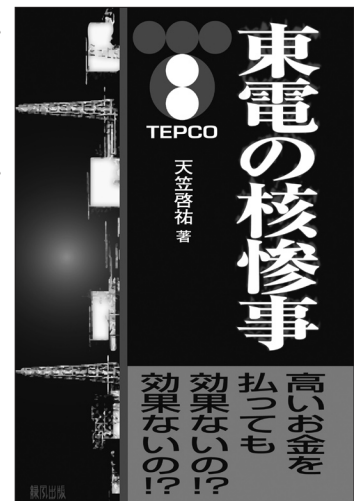
起こるべくして起きた事故を超えて、社会のあり方を変えることができるのか？

環境／社会問題を専門とする出版社・(株)緑風出版(りよくふう・しゅっぱん、代表＝高須次郎)では、7月14日、政府や電力会社が招いた人災・福島原子力発電所事故を振り返り、この負の遺産を抱えながら生きる時代へ向けて、代替エネルギーなどの対案を提起する『東電の核惨事』を刊行しました。

本書でも明らかにされるように、福島の核惨事は政府・東京電力が繰り返すような「想定外」の事件ではなく、ウインズケール、ウラルから、スリーマイル、チェルノブイリへと至る、原子力／核事故の歩みのうえに現れた事故であった。さらに電力会社はそれらを隠蔽して原発建設にまい進しただけでなく、「オール電化」を推進して電力需要の拡大を図り、政府がそれを後押しすることで、原発に依存する社会を作ってきた。

その意味で、この福島の核惨事は東電の、東電による核惨事である。そして現在、核惨事は東電をふくめた電力会社のために、原発必要キャンペーンというかたちで利用されつつある。私たちはこのことをこそ「想定」していなければなりません。本書では過去の事故の経緯を辿ることによってかつて歩んだそうした道を照らしながら、現在進行形の核惨事を読み解く鍵を、私たちに与えてくれます。

原子力村のなりふり構わない巻き返しが、社会全体の未来を暗くし、かつ垂れ流されるままとどまることのない汚染と、そうした体制を変える力を発揮できない日本社会について、世界が幻滅を広げている。本書はこの核惨事の行く末が、いまや「社会のあり方を変えることができるか」という次元の問題に関わっていることを、穏やかな筆致ながらも明快に提起する。



[書誌データ]

『東電の核惨事』ISBN978-4-8461-1111-3 C0036 四六判上製 224頁 本体価格1600円

[著者] 天笠啓祐 (あまがさけいすけ)

1947年東京生まれ。早大理工学部卒。現在、ジャーナリスト、遺伝子組み換え食品いらない！キャンペーン代表、市民バイオテクノロジー情報室代表。主な著書に『原発はなぜこわいか』(高文研)、『面白読本・原発』(つげ書房新社)、『Q&A 電磁波はなぜ恐いか』『DNA鑑定』『Q&A 危険な食品・安全な食べ方』『世界食料戦争』『生物多様性と食・農』(緑風出版)などがある。

(株)緑風出版(りよくふう・しゅっぱん)は1982年の創立の専門書出版社(本社・東京都文京区本郷)。エコロジー・環境問題から内外政治・社会問題まで、現代と未来をみすえた書籍を刊行。2003年、優秀な出版活動に対し唯一贈られる第18回梓会出版文化賞を受賞。刊行図書に『ドキュメント日本の公害』、プロブレムQ&Aシリーズ等がある。

本プレスリリースに関するお問い合わせは、(株)緑風出版・営業部まで  
TEL 03-3812-9420 E-mail: info@ryokufu.com